「キリスト教における蛇の系譜—楽園の蛇」

The Process of Serpents in Christianity – The Serpent of Paradise

竹 田 伸 一
美学・美術史学専攻

要旨

キリスト教美術において、最も古く原初的な蛇の図像はアダムとエバを誘惑した楽園の蛇である。蛇の図像は古代から中世に至るまでは普通の動物として描かれるのが常であったが、8 世紀から 16 世紀にかけては想像上のドラゴンや異種を合体させたような動物などが盛んに描かれた。今回取り上げるのは、14 世紀前半に遡る絵付聖書物語の『人間救済の鏡』(*Speculum humanae salvationis*)の絵である。その楽園の蛇は多くの図像の中でも最も奇妙なものと言える。なぜなら、エバを誘惑する楽園の蛇が女の顔と翼を持つ鳥のような体の姿で描かれているからである。このように描かれる楽園の蛇は他に例がなく、『人間救済の鏡』の独特な図像と言える。この蛇の体はバシリスクのものとすることが妥当と考えられるが、これまでなぜバシリスクの姿で描かれるようになったかの経緯を解明した研究はない。本研究は女の顔とバシリスクの体を持つこの独特な図像を、創世記 3 章 15 節と詩編 91 篇 13 節に関連する文字テクストと蛇やバシリスクを踏みつけるキリストやマリアの図像テクストの両面からその解明を試みるものである。

序論

1．先行研究

わたしのテーマはキリスト教における蛇の系譜を文字テクストと図像テクストの 2 つの側面からその歴史的変遷と相互関係を問うものである。楽園の蛇の図像を研究対象として時代をたどって系譜的に研究した最初の研究は、1917 年の J.K.ボネルの「美術と宗教劇における人間の顔を持つ蛇」[1]である。彼は人間の顔を持つ楽園の蛇の図像が 13 世紀以降に登場することを、文書資料と宗教劇作品の関係から解明しようと試みた。彼はまず文書資料が宗教劇作者に影響を与え、次に美術作者が宗教劇を見てその影響を受けたという仮説を立てた。その前提はラテン語で書かれた文書資料を無学な美術作者が理解するのには無理があり、教養のある劇作家ならば可能というものであった。ただこの前提は美術作者に教養のある宗教的指導者からの指示があれば、容易に崩れものである。ボネルの論文は自己の仮説を有効に証明するには至らなかったが、人間の顔を持つ楽園の蛇の登場がペトルス・コメストルの『ヒストリア・スコラスティカ』の文書に起因すること、また、その後の美術作品と宗教劇作品がその影響を受けて発展したことを時代系譜的に論じたところに重要な意味があった。彼はその論文の中で文書資料として重要なものをいくつか挙げて、その中で特に重要なものとしてコメストルの文書と『人間救済の鏡』の文書と指摘している。また、美術作品として 13 世紀から 16 世紀の絵画、彫刻、ステンドグラス、書物挿絵などを 35 点取り上げている。宗教劇作品として 13 世紀に遡りえるものを 1 点、14 世紀から 17 世紀のものを 14 点取り上げている。

---

[1] Bonnell, John K., "The Serpent with a Human Head in Art and in Mystery Play", *American Journal of Archaeology*, Vol. 21, No. 3, 1917, pp. 255-291

次に楽園の蛇の図像を系譜的に取り上げた研究は、1981年のN.C.フロレスの「乙女の顔を持つ者：1300年から1700年までの美術と文学における女の顔の蛇」[2]という学位論文である。この論文の関心の中心はペトルス・コメストルの『ヒストリア・スコラスティカ』の文書によって人気を博することとなった人間の顔を持つ蛇である。まず、著者はコメストルの文書が中世の他の著作家たちにどのような影響を与えたかを論じ、次に中世からルネサンスにかけての絵画、彫刻、ステンドグラス、書物挿絵などの47点を取り上げて、美術作家の心理的、神学的な解釈の変遷を取り上げている。最後に人間の顔を持つ蛇が楽園物語のコンテクストを離れて、罪の擬人化した象徴として文学作品やその挿絵で用いられていることを論じている。彼女の功績はコメストルの文書に影響を受けて新たに始まった人間の顔を持つ蛇の図像がパリを中心としたイルドフランスからヨーロッパの各地に伝播する経過を明らかにしたことと、その図像が罪や死、悪魔を表す象徴として、他の種類の絵画や文学において用いられたことを示したことである。

ところで、キリスト教学、聖書学の研究者たちの間ではこれまで楽園の蛇が研究テーマとなることはほとんどなかった。なぜなら、蛇は悪魔、サタンと同一視されてずっと忌み嫌われてきたからである。ところが、2010年にアメリカの碩学であるJ.H.チャールズワースによって『善かつ邪悪なる蛇：普遍的象徴のキリスト教化』[3]という700ページを超える研究書が出版された。その中でチャールズワースは古代中近東、グレコ・ローマン、メソポタミアにおいて蛇が決して邪悪なる存在ではなく、むしろ善なる象徴であったことを考古学的資料、文学的資料、言語学的資料によって示し、これまでのキリスト教の神学者、聖書学者による聖書における蛇の否定的な評価が後代の教義によって固定化されたことが原因であって、蛇を扱う聖書テクストを歴史的・批評的に研究した結果ではないことを明らかにした。聖書テクストに描かれる蛇には肯定的なもの、否定的なもの、どちらでもないものが混在しており、伝承の担い手や編集段階によって蛇の評価が異なっていたのだが、後代のユダヤ教、キリスト教の影響によって、本来肯定的な記事や中立的な記事でさえも一義的に否定的に解釈されるようになったのである。

2.『人間救済の鏡』

『人間救済の鏡』は1324年頃にドミニコ会の修道士ザクセンのルドルフによってストラスブールで書かれた絵付聖書物語とするのがかつての定説であったが、現在では作者も発祥地も不明とする方向に傾いている[4]。この本は、まず旧約聖書の太古の歴史を扱い、3章以降は1つの新約聖書の場面（対型）に対して3つの旧約聖書の場面（予型）が対応するように予型論的に構成されている。全体で45章あり、各章に4つの図像と100行近い本文がつく膨大なものである。この本も多大な人気を博し、ラテン語から各国訳に翻訳されて、写本、木版、活版などで出版された。その第1章の4番目の図像が楽園の蛇である。現存する最古の写本はバイエルン州立図書館所蔵の『人間救済の鏡』（Clm146）であり、

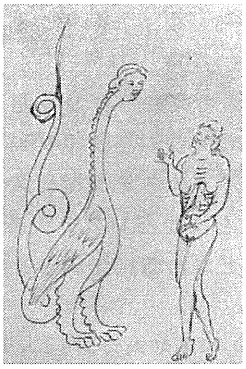
---

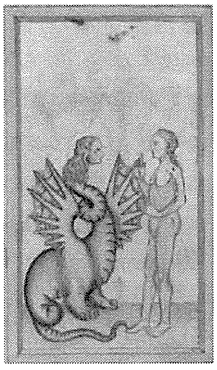
[2] Flores, Nona Cecil, *"Virgineum Vultum Habens": The Woman-heded Serpent in Art and Literature from 1300 to 1700*, University of Illinois at Urbana-Champaign,1981

[3] Charlesworth, James H., *The Good and Evil Serpent – How a Universal Symbol Became Christianized*, Yale University Press, New Haven and London, 2010

[4] A. Henry, *The mirour of mans saluacioun[e] : a Middle English translation of Speculum humanae salvationis : a critical edition of the fifteenth-century manuscript illustrated from Der Spiegel der menschen Behältnis, Speyer, Drach, c.1475*, Aldershot, 1986, p. 10.

これはストラスブール近郊のセレスタという町で 14 世紀半ばにヨハネ騎士修道会で制作されたものと考えられている[5]。エバの誘惑の場面で楽園の蛇はエバよりもかなり背の高い巨大な鳥のような体で描かれ、その顔はエバと似た女の顔で、その長い尻尾は 3 回とぐろを巻いている。2 つ目の図像はフランス国立所蔵の『人間救済の鏡』のもので、14 世紀後半にイタリアのボローニャで制作されたものである。蛇はエバに似た女の顔をしているが、その体はゾウのように太く、長い首は 1 回とぐろを巻き、翼を大きく広げ、ヘビのような尻尾は地面に垂れている。

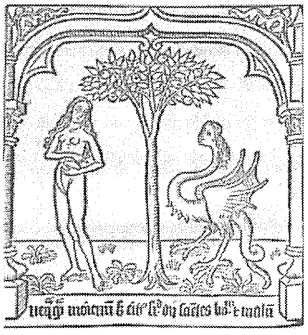




Speculum humanae salvationis, Clm 146 fol. 4r, Bayerische Staatsbibliothek, Munich, Selestat, mid.14th cen..

Speculum humanae salvationis, Arsenal 593 fol. 3v, Bibliothèque nationale de France, Paris, Bologna, 2nd H. 14th cen.

3 つ目の図像は 1480 年にシュパイエルで出版されたドイツ語版の『人間救済の鏡』で、蛇は女の顔、天使のような翼、蛇のような下半身をして、1 回とぐろを巻いて立っている。その前に立つエバは両手に禁断の実を持っている。4 つ目の図像はキュレムボルグで 1483 年に出版されたもので、エバと蛇は善悪の木を挟んで向き合い、蛇は女の顔、鳥のような体、長い尻尾は 1 回とぐろを巻いている。これらの蛇はウィルソンが示すようにバシリスクとして描かれている[6]。



Spiegel der Menschen Behaltnis mit den ewangelien vnd mit epistelen, Rar. 172 p. 20, Bayerische Staatsbibliothek, Munich, Speyer, 1480,

Spieghel onser behoudenisse, Rar. 713 p.14, Bayerische Staatsbibliothek, Munich, Culemborg, 1483.

---

[5] A. Wilson, *A medieval mirror : Speculum humanae salvationis, 1324-1500*, Berkeley, University of California Press, 1984, p. 34.
[6] Ibid., p. 35.

3．聖書

本研究が扱う楽園物語の背景となる元来の文字テクストは旧約聖書の創世記である。旧約聖書は本来ヘブライ語で書かれたもので、死海写本の発見が示すようにかつては系統の異なる複数の本文が伝承されたが、現在、ユダヤ教、キリスト教に影響を与えるものは、写本家（ソーフェリーム）やマソラ学派の活動によって標準化されたマソラ本文（M）である。20世紀以降、学問的な本文批評版が作られ、レニングラード写本を底本としたキリスト教系のビブリア・ヘブライカ・シュトットガルテンシア(Biblia Hebraica Stuttgartensia、BHS)を底本にして多くの各国訳がなされている。まず、ヘブライ語のマソラ本文を文字テクストの基礎と考えたい。

ユダヤ人はバビロン捕囚によって日常言語としてのヘブライ語を失い、アラム語を使うようになった。そこで登場したのが旧約聖書のアラム語訳のタルグムである。主なタルグムは逐語訳的な特色を持つバビロニア系のタルグム・オンケロス（五書）とタルグム・ヨナタン（預言者）。解釈や補足を付加する特色を持つパレスチナ系のタルグム・ネオフィティとタルグム・偽ヨナタン（エルサレム）などがある。これらを参照することで、その後のユダヤ人の解釈の系譜が理解できる。

難解なヘブライ語と異なってデアスポラのユダヤ人や外国人の多くに受け入れられたのは紀元前3世紀に生まれたギリシア語訳のセプチュアギンタ（七十人訳、LXX）である。その後、旧約聖書のギリシア語訳は1、2世紀のユダヤ教徒による翻訳のテオドティオン訳、アキュラ訳、シュンマコス訳、3世紀にはオリゲネスによってそれらのギリシア語訳とヘブライ語本文などを対照させたヘクサプラ（六欄聖書）が作られ、4世紀にはキリスト教会によるギリシア語訳などが加わった。トリエント公会議の要請で、4世紀の写本コーデックス・ヴァチカヌス(B)を底本にしてシクストゥス版のギリシア語訳聖書が1587年にローマで刊行された。それが19世紀まで西欧を網羅するギリシア語訳聖書となった。

西方教会の中にラテン語を用いる者たちが現れ、ギリシア語訳聖書を底本に聖書をラテン語に翻訳した。それらが古ラテン語訳（Vetus Latina）である。その後、4世紀末の教皇の訓令にしたがってヒエロニムスが新たにラテン語に訳したのがウルガタ訳である。これは後のローマ・カトリック教会の公認聖書となる。その結果、中世のキリスト教美術に最も大きな影響を与える聖書はこのウルガタ訳である。

以上のように旧約聖書の文字テクストを確認するためには、ヘブライ語のマソラ本文を中心にして諸タルグムを参考にすること、ギリシア語のセプチュアギンタを中心に他のギリシア訳を参考にすること、ラテン語のウルガタ訳を中心に古ラテン語訳を参考にすることが望ましいであろう。

I．文字テクスト

1．蛇に関する聖書テクスト

今回の研究で聖書の文字テクストで特に重要なのは、創世記3章1節、3章15節、詩編91篇13節である。創世記3章1節は蛇の存在をどうとらえるかが最も表れる聖句であり、創世記3章15節はユダヤ教にとってはメシア待望の聖句であり、キリスト教にとっては人間の救いを予言する「原始福音」と呼ばれる神学的根拠となる聖句である。また、詩編91

篇 13 節はキリスト教では古くから創世記 3 章 15 節と合わせて、キリストのサタンへの勝利の聖句と解釈されたものだからである。

創世記 3 章 1 節

新共同訳　主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。

マソラ　וְהַנָּחָשׁ הָיָה עָרוּם מִכֹּל חַיַּת הַשָּׂדֶה אֲשֶׁר עָשָׂה יְהוָה אֱלֹהִים

ヘブライ語のマソラ、アラム語のタルグムの冒頭を直訳すると、次のようになる。

マソラ　そして、その蛇は（הַנָּחָשׁ）賢かった（עָרוּם）

タルグム・オンケロス　そして、蛇は（חִיוְיָא）賢く狡猾であった（עָרִים חכים）

タルグム・ネオフィティ　そして、蛇は（חויא）狡猾であった（חכים）

タルグム・偽ヨナタン　そして、蛇は（חויא）悪事において狡猾であった（חכים לביש）

ヘブライ語の「賢い」（עָרוּם）には否定的な意味はない。タルグムでは「賢くて狡猾」、「狡猾」、「悪事において狡猾」とユダヤ教による蛇の否定的な解釈が徐々に付加されている。

LXX　ὁ δὲ ὄφις ἦν φρονιμώτατος　ところで、その蛇は最も賢かった

アキュラ訳、テオドティオン訳　πανοῦργος　狡猾であった

シュンマコス訳　πανουργότερος　より狡猾であった

形容詞の比較級、最上級の明瞭なヨーロッパ言語のギリシア語訳のセプチュアギンタでは最上級の「最も賢い」（φρονιμώτατος）が用いられ、この形容詞には特に否定的な意味はない。他方、ユダヤ教徒によるアキュラ訳、テオドティオン訳では原形の「狡猾な」（πανοῦργος）、シュンマコス訳では比較級の「より狡猾な」（πανουργότερος）が用いられ、タルグムと同様に蛇に対する否定的な解釈が盛り込まれている。

ウルガタ　Sed et serpens erat callidior　しかし、蛇はより狡猾であった。

古ラテン語訳　Serpens autem erat sapientior　さて、蛇はより賢かった。

（prudentior、sapientissimus、prudentissimus、astutior）

ギリシア語と同様にヨーロッパ言語のラテン語も形容詞の比較級、最上級が明瞭である。古ラテン語訳には公認訳ではないので、様々なものが存在するが、比較級の「より賢い」（sapientior 、prudentior）、最上級の「最も賢い」（sapientissimus、prudentissimus）がある。これらには否定的な意味はない。古ラテン語訳にも比較級の「より狡猾な」（astutior）を使うものがあったが、公認訳であるウルガタは同様な否定的な意味を持つ「より狡猾な」（callidior）を採用した。このことから、キリスト教会も蛇に対して否定的な解釈をしたことが明らかとなる。

創世記 3 章 15 節

創世記 3 章 15 節の前半部分はヘブライ語のマソラ、アラム語のタルグム、ギリシア語の諸訳、ラテン語訳でもほぼ内容は一致している。特に差異があって問題となるのは後半部分である。

新共同訳　お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。
彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。

マソラ　וְאֵיבָה אָשִׁית בֵּינְךָ וּבֵין הָאִשָּׁה וּבֵין זַרְעֲךָ וּבֵין זַרְעָהּ
הוּא יְשׁוּפְךָ רֹאשׁ וְאַתָּה תְּשׁוּפֶנּוּ עָקֵב

マソラでは前半の「女の子孫」を男性形の単数の代名詞「彼が」（הֻוא）が受けて動詞「砕く」（שׁוף）が続き、蛇を意味する二人称で「お前は」（אַתָּה）「砕く」と続く。ここで確認すべきことは、女の子孫が男性単数代名詞で受けられていること、女の子孫と蛇の両者に対して用いられる動詞がどちらも同じ「砕く」（שׁוף）であることである。

タルグム・オンケロス　彼は（הֻוא）お前が初めに彼にしたことを覚えてお前を監視し（נטר）、お前は終りに彼を監視する（נָטַר）。

タルグム・ネオフィティ　女の子孫が律法を守って（נטרין）その掟を行うときは、彼らはお前の頭を打って（מחיי）お前を殺し、また、彼らが律法を捨ててその掟を行わないならば、お前は女の子孫の踵に咬みついて（נכת）傷を負わせる。しかし、彼女の子孫には癒しがあり、蛇よ、お前には癒しがない。なぜなら、彼らには最後に王なるメシア（משׁיח）の日に癒しが与えられるからである。

タルグム・偽ヨナタン　女の子孫が律法の掟を守る（נטרין）ときは、お前の頭を打ち（מחיין）、また、律法の掟を捨てるときは、お前はその踵に咬みつく（נכית）。しかし、彼らには癒しがあるが、お前には癒しがない。彼らには最後に王なるメシアの日に癒しが与えられるからである。

アラム語訳では女の子孫は単数代名詞、または複数代名詞でユダヤ民族と取られ、終末論的メシア待望の解釈がすべてのタルグムで付加されている。タルグム・ネオフィティとタルグム・偽ヨナタンでは、「律法を守る（נטר）ならば」という条件が付加され、女の子孫が蛇の頭を「打つ」（מחי）という主動詞が続く。また、「律法を守らないならば」という条件が付加されてその時は蛇が子孫の踵に「咬みつく」（נכת）のである。ヘブライ語のマソラの「彼は砕く」と「お前は砕く」に対して、パレスティナのタルグムでは「彼は打つ」と「お前は咬みつく」が対応しているのである。ところでこれらのタルグムの条件節で用いられた（律法を）「守る」（נטר）という言葉は「監視する」という意味を併せ持つ動詞である。バビロニア系のタルグム・オンケロスでは、ヘブライ語マソラで用いられた「砕く」に対して、パレスティナ系の両タルグムが主節で用いた主動詞の「打つ」ではなく、条件節で用いられた動詞「守る」（נטר）を用いている。その結果、この動詞は「守る」ではなく、「監視する」という意味に翻訳されるようになっている。一般的にタルグム・オンケロスはヘブライ語マソラの直訳的なアラム語訳と考えられるが、創世記3章15節に関してはマソラの直訳と言うよりもむしろパレスティナ系のタルグムの短縮版という意味合いが強い。

LXX　αὐτός σου τηρήσει κεφαλήν καὶ σὺ τηρήσεις αὐτοῦ πτέρναν
彼はお前の頭を監視し、お前は彼の踵を監視する。

アキュラ訳　προστρίψει　打撃を与える

シュンマコス訳　θλίψει　強く押し付ける

ギリシア語訳のセプチュアギンタではタルグム・オンケロスを踏襲するように動詞「監視する」（τηρέω）を用いている。この動詞はアラム語の動詞（נטר）と同様に、「守る」という意味と「監視する」の意味を併せ持つ。他方、アキュラ訳は「打撃を与える」

（προστρίβω）を、シュンマコス訳は「強く押し付ける」（θλίβω）を用い、ヘブライ語マソラの「砕く」の意味を保持している。すべてのギリシア語訳で女の子孫を受ける代名詞が「彼は」（αὐτός）という男性形である。

ウルガタ　ipsa conteret caput tuum, et tu insidiaberis calcaneo ejus.

彼女はお前の頭を砕き、お前は彼女の踵を伏し狙う。

古ラテン語訳　ipse tuum calcabit capt et tu observabis calcaneum eius

彼はお前の頭を踏みつけ、お前は彼の踵を監視する。

ipsa tibi (ob)servabit　　servabis　(eius) calcaneum

彼女はお前の頭を監視し、お前は彼女の踵を監視する。

古ラテン語訳では女の子孫をヘブライ語、ギリシア語と同様に男性代名詞「彼は」(ipse) で受けるものと女性代名詞「彼女は」（ipsa）で受けるものがある。これは女の子孫に象徴される救済者を御子キリストと取るか、聖母マリアと取るかのキリスト教の神学上の解釈が反映する部分である。後の宗教改革の時代にはプロテスタント陣営が「彼は」（ipse）を主張し、カトリック陣営は「彼女は」（ipsa）に象徴される聖母マリアとカトリック教会の正統性を主張し、争うわけである[7]。カトリックの公認訳となるウルガタは「彼女は」（ipsa）を採用している。つまり、ウルガタはキリストではなく、救済者としてのマリアを強調しているのである。女の子孫に関する動詞についてはヘブライ語のマソラに近い「砕く」（contereo）や「踏みつける」（calco）を使用するものとギリシア語のセプチュアギンタに近い「監視する」（obserbo、serbo）を使うものがある。蛇に関する動詞はセプチュアギンタに近い「監視する」を用いるものが多いが、ウルガタは動物の蛇の行為に近い「伏し狙う」（insidior）を用いている。

詩編 91 篇 13 節

新共同訳　あなたは獅子と毒蛇を踏みにじり、獅子の子と大蛇を踏んで行く。

עַל־שַׁחַל וָפֶתֶן תִּדְרֹךְ תִּרְמֹס כְּפִיר וְתַנִּין　マソラ

詩編 91 篇 13 節についてヘブライ語のマソラを語順通りに逐語訳して見ていこう。

マソラ子獅子の上を（עַל־שַׁחַל）、そして毒蛇を（וָפֶתֶן）、あなたは踏み（תִּדְרֹךְ）、
あなたは踏みつける（תִּרְמֹס）、若獅子を（כְּפִיר）、そして、大蛇を（וְתַנִּין）。

詩の構成としては 1 行目と 2 行目は対応し、ほぼ同じ内容を言い直したようなものになっている。1 行目（目的語 1、目的語 2、動詞）と 2 行目（動詞、目的語 1、目的語 2）を構成する動詞、目的語もそれぞれ対応関係にあることがわかる。

	1 行目	2 行目
動詞	「踏む」（דָּרַךְ）	「踏みつける」（רָמַס）
目的語 1	「子獅子」（שַׁחַל）	「若獅子」（כְּפִיר）
目的語 2	「毒蛇」（פֶּתֶן）	「大蛇」（תַּנִּין）

これらの対比からわかることはヘブライ語のマソラは 1 行目も 2 行目も獅子と蛇を踏むことを語っている。後で扱うのだが、片足で獅子を、もう一方の足で蛇を踏むラヴェンナ

[7] カルヴァンはその『創世記注解』で、カトリックの「彼女」（ipsa）の誤りを痛烈に非難し、言語学的には子孫を代用する集合名詞と取っている。カルヴァン、『カルヴァン旧約聖書註解創世記』、新教出版、1984 年。新ウルガタ訳（Nova Vulgata）では中性形の「それ」（ipsum）で訳している。

のキリスト像はマソラに忠実な図像と言えるだろう。アラム語訳のタルグム・詩編も同様な内容を繰り返している。

タルグム・詩編　雄の獅子の子（גור בר אריון）の上と蛇（פיתנא）をあなたは踏み、

あなたは蹴る、這う獅子（תרמוס אריא）と毒蛇（חורמנא）を。

詩編91篇13節ではマソラとタルグムの翻訳はほぼ一致している。マソラの「子獅子」（שַׁחַל）をタルグムはわざわざ「雄の獅子の子」（גור בר אריון）と訳している。新共同訳の単に「獅子」と訳すのは誤りである。

LXX　ἐπ' ἀσπίδα καὶ βασιλίσκον ἐπιβήσῃ καὶ καταπατήσεις λέοντα καὶ δράκοντα

毒蛇の上とバシリスクをあなたは踏み、獅子とドラゴンをあなたは踏みつける。

シュンマコス訳　επι (suffodientem arenam) και ασπιδα πατησεις, ερψεις επι λεοντα ολοθρευοντα και δρακοντα

砂を掘る蛇の上と毒蛇をあなたは踏みつけ、滅ぼす獅子とドラゴンをあなたは踏む。

ギリシア語訳のセプチュアギンタでは登場する4つの動物を同じものの繰り返しではなく、異なる別種の動物として「毒蛇」（ἀσπίς）、「バシリスク」（βασιλίσκος）、「獅子」（λέων）、「大蛇、ドラゴン」（δράκων）と訳している。ここで驚くことはバシリスクの登場である。セプチュアギンタではバシリスクという言葉はここにしか登場しない。シュンマコス訳はイザヤ書30章6節の「火の蛇」（שָׂרָף）をバシリスクと訳している。新約聖書ではこの単語はヨハネ4章46、49節に登場するが、そこでは「王宮の役人」を意味する。この言葉は他に「小さな王」を意味する。現代ではイグアナ科の爬虫類を意味するが、古代から中世の人々が描くバシリスクは蛇の王、鶏の頭と脚、ドラゴンの胴と尾、翼を持ち、吐く息とにらみで人を殺すと考えられた伝説の動物である。オリゲネスのヘクサプラのシュンマコス訳ではマソラの「子獅子」（שַׁחַל）に対してギリシア語ではなく、ラテン語で「砂を掘る蛇」(suffodientem arenam)と注がつけられ、「毒蛇」（פֶּתֶן）に対してはバシリスクではなく、直訳の「毒蛇」（ἀσπίς）が用いられている。

ウルガタ　Super aspidem et basiliscum ambulabis, et conculcabis leonem et draconem.

毒蛇の上とバシリスクをあなたは踏み、獅子とドラゴンをあなたは踏みつける。

ラテン語訳のウルガタではヘブライ語のマソラ本文ではなく、セプチュアギンタが詩編翻訳に用いられたため、「毒蛇」（aspis）、「バシリスク」（basiliscus）、「獅子」（leo）、「大蛇、ドラゴン」（draco）と訳され、この結果、伝説の動物バシリスクが聖書翻訳に登場することになった。

2．創世記3章15節と詩編91篇13節を結びつける聖書註解

2紀のエイレナイオス(Irenaeus, c. 130~c. 203)以来、創世記3章15節と詩編91篇13節は「蛇を踏みつける」という共通概念で結びつけられて「キリスト（救済者）が蛇に象徴される悪魔に勝利する」ことと解釈されてきた。また、詩編91篇の4つの動物は悪魔の異なる表現と解釈された。

このために、**神は蛇と女、女の末の間に敵意を据え**、彼らは互に敵意を持ち続ける。**彼は踵を咬まれるが、その足の裏で敵の頭を踏みつける力を持つ**（創世記 3：15）。しかし、その末が蛇の頭を踏むことを命じられるまでは、他方は咬みつき、殺し、人の歩みを妨げる。彼は**マリア**から生まれ、預言者は彼について語る。「**汝は毒蛇とバシリスクを踏みにじり、獅子と竜**

を踏み行く」(詩編 91：13)。毒蛇は罪を意味し、立ち上がり、飲み込み、咬みついて人を恐れさせる。バジリスクは死を意味する。かつて世界を支配したその力はやがて奪われる。ライオンは反キリストであり、後の代に人に荒々しく敵対するが、キリストによって踏みつけられる。竜はサタン自身であり、キリストは「年を経た蛇である竜」を縛り、服従させ、そのすべての力を踏みつける。[8]

そして、この創世記3章15節と詩篇91篇13節を結び付けるエイレナイオスと同様な解釈は5世紀の作者不詳の『創世記注解』でもなされ、その引用は7世紀のセビリアのイシルドス、8世紀のベーダ、ウィクボドゥス、9世紀のフラバヌス・マウルスなどによって中世を通じて度々行われた。ウィクボドゥスはカール大帝に仕えた神学者なので、後で扱う8、9世紀のカロリング朝のキリスト像に影響を与えたことが考えられる。

しかし、「**わたしはお前と女の間に敵意を置く**」と言われたことは、**聖処女**についてであり、彼女から主は生まれ、そのことは彼女の時の出来事と理解される。やがて生まれる主は、敵である死に勝利し、死の原因である者を滅ぼすと約束される。さらに加えられて言われることは、「**彼女はお前の頭を砕き、お前は彼女の踵を伏し狙う**」。それは**マリア**の胎の実であるキリストと理解される。彼は騙され、死に、そして、甦り、勝利のうちに来られた。「彼はお前の頭を砕く」、これは死についてである。御父にとっての御子についてダビデが語っている。「**あなたは毒蛇とバシリスクの上を歩み、獅子と竜をその足の下に踏みつける**」(詩編90)。毒蛇は死、バシリスクは罪、ライオンは反キリスト、竜は悪魔のことを言っている。[9]

II. 図像テクスト

1．獅子と蛇を踏みつけるキリスト像

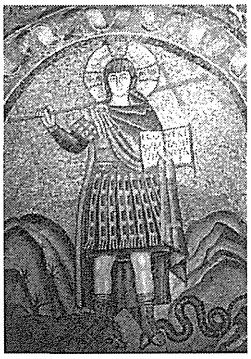
詩編91篇13節に基づく初期の図像の形式はキリストが片足で獅子を、もう一方の足で蛇を踏みつけるものである。先に触れたようにこの形式はヘブライ語のマソラの内容に忠実なものである。それらのいくつかはかつてローマ帝国の都であったイタリアのラヴェンナで見ることができる。その中で最も古いものは5世紀初頭の石棺のレリーフで、二人の天使の中心でキリストが右足で獅子を、左足で蛇を踏みつけている。次はアリウス派洗礼堂として有名なネオン洗礼堂の中にあるレリーフ装飾の一部である。洗礼堂自体は4世紀末に建てられ、5世紀にモザイク装飾が施されたが、このレリーフは正統派になった後に施されたことが考えられる。3つ目は500年頃のラヴェンナの大司教館礼拝堂の「勝利者キリスト」の美しいモザイク画である。キリストは当時の軍服を身にまとい、獅子と蛇の頭を踏みつけている。右手には十字架を担ぎ、左手にはヨハネ14章6節を記した聖書を開いている。キ

---

[8] エイレナイオス、『異端論駁第Ⅲ巻』(Irenaei, Contra Haereses Lib 3)。本文中の太字と括弧内の聖書個所は本論文筆者による。Irenaei, Contra Haereses Lib 3, PG 7-1 col. 964. Irenaeus, Against Heresies, Book III Chapter 23 Section 7, Arguments in opposition to Tatianus, *The Ante-Nicene Fathers Translations of The Writings of the Fathers down to A.D. 325 Vol. I*, ed Alexander Roberts and James Donaldson, Grand Rapids, p. 457.

[9] Auctor incertus, Commentarii in Genesim, PL 50 col. 914. 本文中の太字は本論文筆者による。子の注解書の解説と全く同じものが以下の著作で何度も引用されている。Isidorus Hispalensis, Quaestiones in Veterum Testamentum, PL 83 col. 221, Auctor incertus (Beda?), De creatione VI dierum, PL 93, col. 232, Auctor incertus (Beda?), Quaestiones super Genesim, PL 93, col. 282, Wicbodus , Quaestiones in Octateuchum, PL 96 col. 1163, Rabanus Maurus, Commentariorum in Genesim, PL 107 col. 495.

リストに踏みつけられる獅子と蛇は悪魔サタンを意味する一方、ローマ帝国の敵対する異教の国々、当時のラヴェンナの状況から考えると、正統主義に対するアリウス派の勢力を暗示することが考えられる。



Pignatta-sarcophagus, 400-410, Ravennna. stucco-relief, Baptistery of Neon, c. 450, Ravenna.
Christ Victor, c.500, mosaic, Archbishop Chapel, Ravenna.

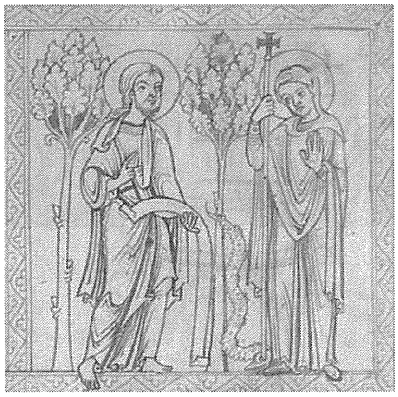
2．四つの動物を踏みつけるキリスト像

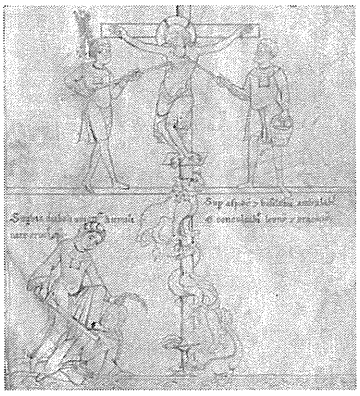
詩編91篇13節に基づく図像の第2の形式はカロリング朝の象牙細工のキリスト像に見られる。これらはヘブライ語のマソラではなく、ギリシア語のセプチュアギンタ、ラテン語のウルガタ訳の影響のもとにある図像である。キリストは獅子、毒蛇に加えてバシリスク、大蛇の4種の動物を踏みつけている。1つ目は象牙細工の二つ折祭壇で、二人の天使の中心にキリストが立ち、右足で獅子と毒蛇を、左足で大蛇とバシリスクを踏みつけている。大蛇の下のバシリスクは鶏のように描かれている。2つ目は『福音書聖句集』写本の象牙細工の装丁である。写本自体は800年頃のもので、この象牙細工の「勝利者キリスト」は9世紀初頭のものである。獅子の下の毒蛇は4つ足のトカゲのように描かれ、バシリスクは鶏の体に蛇の尾を持つ姿で描かれている。

Diptych of Genoels-eldern, Rhein-Maas-Gebiet, 8C, Musée des Arts, Brüssel
Front cover of Carolingian ivory panel Christ Victor over lion, dragon, aspis and basilisk, 9C, MS. Douce 176, Bodleian Library, Oxford.

3．マリア崇拝

ところで、中世には最後の審判の教説が強調され、その結果、本来神と人間の仲介者であるキリストは近寄りがたい恐ろしい裁き主となってしまう。ビザンチンではデイシス（δέησις）と呼ばれる図像が生まれた。それは玉座に座る全能者キリストに聖母マリアと洗礼者ヨハネがその傍らから人間のために嘆願するというものである。その傾向は西欧では加速して審判者キリストとの仲保者を求めた人々はマリア崇拝に熱狂し、マリアに捧げられる教会が名を連ねるわけである。創世記3章15節の解釈でも聖母マリアが蛇を踏みつけるという考えが強化され、蛇への勝利者としてのマリアの図像が1170年頃にロマネスクの挿絵写本であるレーゲンスブルグの『十字架讃歌物語』（Dialogus de laudibus sanctae crucis）に初めて現れる。その本の冒頭には創世記3章15節の蛇と女に対する神の裁き場面が描かれ、聖母は十字架の付いた杖で蛇の頭を刺している。キリストの磔刑の場面ではキリストがローマの兵卒に槍で刺される一方、キリストの足元にライオン、鳥のような動物、鶏のような動物、トカゲのような動物が十字架の木に串刺しにされている。横には詩編91篇13節の引用があるので、それらが獅子、ドラゴン、バシリスク、毒蛇であることがわかる。十字架の左下では擬人化された「謙遜」が「高慢」を剣で貫いている。この『十字架讃歌物語』の中でも創世記3章15節と詩編91篇13節が結びつけられ、それらが図像として表現されているのである。





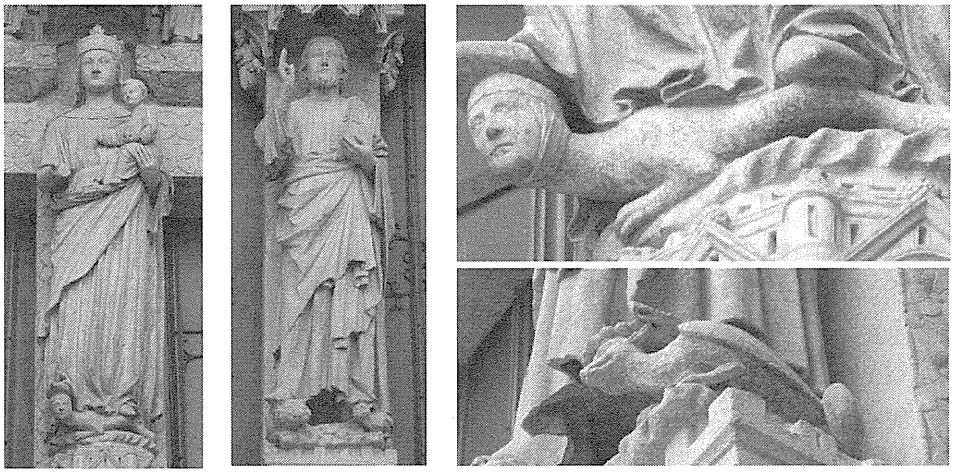
Dialogus de laudibus sanctae crucis Clm 14159 fol.1, fol.9 c.1170 Bayerische Staatsbibliothek, Munich

序論でコメストルの『ヒストリア・スコラスティカ』の創世記注解が楽園の蛇の図像に決定的な影響を与えたことに触れたが、ここでその文章を見てみよう。コメストルは、「蛇、または悪魔についての項目」で、楽園を追放されたルシファー（サタン）が人間に嫉妬して人間を誘惑したと書いている。また、特に蛇の特徴に関して、コメストルは次のように記している。

Et hoc per serpentem,	そして、この蛇によって、
quia tunc serpens erectus est ut homo,	なぜなら蛇は人間のように立っていた。
quia in maledictione prostratus est, ,	というのは、蛇は呪いによって倒されたので、
et adhuc ut tradunt, phareas erectus incedit.	それまでは立って歩いていたのだから。
Elegit etiam quoddam genus serpentis,	それ故、（悪魔は）ベーダが言うように、
Jut ait Beda, virgineum vultum habens,	乙女の顔を持つある種の蛇を選んだ。

quia similia similibus applaudunt.[10]　　似たものは似たものに賛同するからである。

コメストルの文章は旧約聖書外典の「モーセの黙示録」の表現と酷似しており、彼がその内容に基づいてこの聖書注解を書いたことがうかがえる。ただ、蛇が「乙女の顔を持つ」と書いた文章はこれが最初のものであった。コメストルの『ヒストリア・スコラスティカ』は当初は修道士のための教科書として書かれたものだったが、一般にも大きな人気を博して多くの言葉に翻訳され、挿絵つきで出版された。その結果、キリスト教美術では人間の顔を持つ楽園の蛇が数多く登場することになった。その最初の作品がアミアンのノートルダム寺院の教会扉口彫刻である。幼子キリストを抱く聖母マリアは人間の顔を持つトカゲのような蛇を踏みつけている。また、このマリア像の隣の中央扉口のキリスト像は右足の下にライオンを、左足の下にバシリスクを踏みつけている。ここでもマリア像で創世記3章15節、キリスト像で詩編91篇13節が結びつけられて描かれている。



Virgin and Child 1220-1230, Christ (Beau Dieu) c. 1220, Stone, Cathedral, Amiens.

『ヒストリア・スコラスティカ』の次に女の顔を持つ楽園の蛇に影響を与えた文書は、『人間救済の鏡』と言える。この本はその第1章で楽園の蛇が女の顔を持つことに触れるだけでなく、女の顔とバシリスクの体を持つ蛇をその挿絵で明示したからである。

Quapropter diabolus, homini invidens, sibi insidiatur.	人間に嫉妬していた悪魔は、人を待ち伏せ、
Et ad praecepti transgressionem ipsum inducere nitebatur:	掟にそむくように人を誘惑しようとした。
Quoddam ergo genus serpentis sibi diabolus eligebat.	それ故、悪魔はある種の蛇を選んだ。
Qui tunc erectus gradiebatur et caput virgineum habebat:	当時、蛇は立って歩き、乙女の頭を持っていた。
In hunc fraudulosus deceptor mille artifex intrabat,	悪魔はこの不正な騙す役者に入って、
Et per os eius loquens, verba deceptoria mulieri enarrabat.	蛇の口を通して偽りの言葉を女に語った。[11]

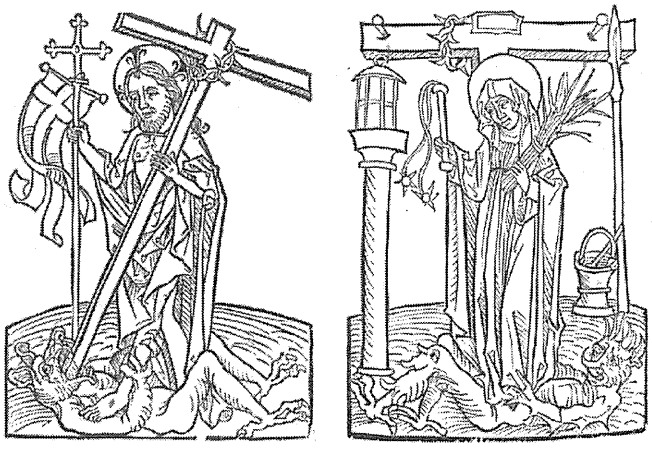
[10] Peter Comestor, *Historica Scholatica*, 1072, *Patrologiae Cursus Completus, Series Latina Vol.198*, ed. J.P. Migne, Paris, 1844-1903.「ベーダが言うように」という句があるが、ベーダの文書にはそのような句がないため、コメストルが蛇が女の顔を持つと書いた最初の人物と考えられている。

[11] 『人間救済の鏡』第 1 章抜粋。

女の顔を持つ蛇はキリスト教美術で数多く描かれている。その多くは動物の蛇の体に女の顔だけをつけたものと、女の上半身、トルソと蛇の下半身を持つものである。しかし、『人間救済の鏡』の楽園の蛇の姿はとても異様なものである。というのは、蛇が女の顔を持つバシリスクとして描かれているからである[12]。その理由を解明した研究はこれまでなかったが、わたしはその理由はこの本の第30章「マリアが我らの敵である悪魔に打ち勝つ」の文章に見出されると考える。第29章「キリストが我らの敵である悪魔に打ち勝つ」では、キリストの受難（passio）によって悪魔に打ち勝つことが展開されるのだが、第30章ではマリアがキリストと共に苦しむこと（compassio）によって悪魔に打ち勝つことが展開される。この第30章の文中で創世記3章15節と詩編91篇13節が結ばれて引用され、マリアが悪魔に勝利することが語られている。

Super aspitem et basiliscum tu Maria ambulabis	毒蛇とバシリスクの上を、汝、マリアは踏み、
Leonem et draconem id est sathanam conculcabis	サタンである獅子とドラゴンを汝は踏みつける。
et tu sathan insidiaberis calcaneo eius homines inpugnanto	サタン、お前は彼女の踵を伏し狙い、敵対するが、
Et ipsa coneret caput tuum conpassionem te superanto	彼女はお前の頭を砕き、受苦によってお前に打ち勝つ。

上記の２つの聖書テクストは2世紀の教父エイレナイオス以来、関連付けられ、救い主の悪魔への勝利として解釈されてきたものである。それがまさに『人間救済の鏡』の中の文字テクストで結びつけられることによって、創世記3章の楽園の蛇は、詩篇91篇の獅子、毒蛇、バシリスク、ドラゴンと共に置き換え可能な悪魔の象徴となったのである。それ故、『人間救済の鏡』では楽園の蛇がバシリスクの体で描かれるに至ったのである。第1章でエバがバシリスクの体の蛇に誘惑を受けて堕罪する一方、第30章ではマリアがバシリスクに象徴される悪魔を踏みつけて勝利するのである。ここにはエバとマリアの対比も存在する。



Spiegel der Menschen Behaltnis mit den ewangelien vnd mit epistelen, Speyer, 1480, Rar. 172 pp.235,237[13]

[12] A. Wilson, *A medieval mirror : Speculum humanae salvationis, 1324-1500*, Berkeley, University of California Press, 1984, p. 143.

[13]この図像は 1480 年にシュパイエルで制作されたドイツ語版の第 29 章、第 30 章の挿絵である。キリストは右手に復活を示す旗を持ち、左手に持つ十字架を悪魔の口に押し込み、足で悪魔を踏みつけている。マリアは釘にキリストの血の跡が残り、茨冠がかけられた十字架の前に立ち、悪魔を踏みつけている。マリアの周りにはキリストに使われたとされる拷問道具が並べられている。

文献

Biblia Hebraika Stuttgartensia, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1984.

Septuaginta, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1979.

The Greek New Testament, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1994.

Vetus Latina 2. Genesis, B. Fischer ed., Freiburg, 1951.

Biblia Sacra Iuxta Latinam Vulgatem versionem Librum Genesis, Rome, 1926.

『聖書　旧約聖書続編つき　新共同訳』、日本聖書協会、1993年。

M. Aberbach & B. Grossfeld, *Targum Onkelos to Genesis A critical Analysis Together With An English Translaion of the Text*, University of Denver, 1982.

M. McNamara, *The Aramaic Bible Volume 1A Targum Neofiti 1 : Genesis*, Cllegeville, 1992.

M. Maher, *The Aramaic Bible Volume 1B Targum Pseudo-Jonathan: Genesis,* Collegeville, 1992.

Ωριγενουσ τα ευρισκομενα παντα = Origenis opera omnia, (Patrologiæ cursus completes, Series græca ; tomus 15-16^{2nd}, ed. J.-P. Migne), 1857-1976

Field, Frederick, *Origenis Hexaplorum quae supersunt; sive Veterum interpretum Graecorum in totum Vetus Testamentum fragmenta*, Oxford, 1875.

Patrologiae Cursus Completus, Series Graeca, ed. J.P. Migne, Paris, 1860-1900 (PG)

Patrologiae Cursus Completus, Series Latina, ed. J.P. Migne, Paris, 1844-1903 (PL)

Speculum humanae salvationis, Spencer Collection Ms. 015, New York Public Library, ca. 1410.

Speculum humanae salvationis, Ms. Français 6275, Bibliothèque Nationale de France, ca. 1485.

J. Lutz et P. Perdrizet, *Speculum humanae salvationis : texte critique, traduction inédite de Jean Mielot (1448) : les sources et l'influence iconographique, principalement sur l'art alsacien du XIVe siècle*, Leipzig, 1907.

Speculum humanae salvationis : Codex Cremifanensis 243 des Benediktinerstiftes Kremsmünster, Kommentar von Willibrord Neumüller, Graz, 1997.

A. Wilson, *A medieval mirror : Speculum humanae salvationis, 1324-1500*, Berkeley, University of California Press, 1984.

A. Henry, *The mirour of mans saluacioun[e] : a Middle English translation of Speculum humanae salvationis : a critical edition of the fifteenth-century manuscript illustrated from Der Spiegel der menschen Behältnis, Speyer, Drach, c.1475*, Aldershot, 1986.

Lexikon der christlichen Ikonographie,vol.1-4, ed. Engelbert Kirschbaum, Herder, 1968-72

Georg Troescher, Studien zu frühen Landkirchen im Tübinger Raum, *Zeitschrift für Kunstgeschichte*, 15. Bd., H.1, 1952, pp. 17-39

Peter Bloch, Die Muttergottes auf dem Löwen, *Jahrbuch der Berliner Museen*, 12. Bd., 1970, pp. 253-294

Kathleen M. Openshaw, Weapons in the Daily Battle: Images of the Conquest of Evil in the Early Medieval Psalter, *The Art Bulletin*, Vol. 75, No. 1, 1993, pp. 17-38

Thomas E. A. Dale, Monsters, Corporeal Deformities, and Phantasms in the Cloister of St-Michel-de-Cuxa, *The Art Bulletin*, Vol. 83, No. 3, 2001, pp. 402-436

Annette Reed, Blessing the Serpent and Treading on Its Head: Marian Typology in the S. Marco Creation Cupola, *Gesta*, Vol. 46, No. 1, The University of Chicago Press, 2007, pp. 41-58

Herbert L. Kessler, Christ the Magic Dragon, *Gesta*, Vol. 48, No. 2, 2009, pp. 119-134